

大学教育における児童文学作品の活用(4)

— 古田足日『宿題ひきうけ株式会社』から —

Utilization of Juvenile Literature Works in University Education (4)

— Based on “Homework Underwriting Company (Shukudai-hikiuke-kabushikigaisha)”

by Japanese Juvenile Story Writer FURUTA Taruhi —

茶谷 薫 CHATANI Kaoru

(芸術教養領域)

はじめに

本誌の前号等に記したとおり、子ども向けの小説やマンガ作品から学べることは多数ある^{1,2,3,4,5,6}。また、幼い頃に読んだ作品を社会に出てから再読すれば、視点が変わり、豊かな読み方ができるようになる。社会、学校、家族などの問題を実感するようになっているためであろう。

それ故、筆者が本務校である名古屋芸術大学における教育目標および、その目標の下に設定されている筆者の担当授業において、授業で児童向けとされる作品を教材活用する意義がある。言うまでもなく、同様の知見は他の大学や高等学校を含む多くの教育現場でも有用であり、実践もされているが、それに付加していければ幸いである。

本稿では児童文学作品のうち、古田足日の『宿題ひきうけ株式会社』を題材に、授業で活用できる内容を列挙する⁷。

『宿題ひきうけ株式会社』と古田足日

『宿題ひきうけ株式会社』は1966年に理論社から『ジュニア・ロマンブックス版』で出た後、1973年に『理論社名作の愛蔵版』、1979年に『フォア文庫版』がそれぞれ出版された。上記三つの最終版は、各々1973年に37刷、1995年に78刷、同年75刷で、かなりのロングセラーである。

後二者が同じ1995年7月に最終版となったのは、後に詳述するが、作品内に引用されていた宇野浩二の『春を告げる鳥』のアイヌ民族差別などについて指摘があり、作者の古田が反省し、新版を執筆することとなったからだ。新版は旧版と同様、1996年に『理論社名作の愛蔵版』および『フォア文庫版』として出版された後、『新・名作の愛蔵版』として2001年に出版された⁷。

『宿題ひきうけ株式会社』は、理論社のWEBサイトでは小学校高学年以上向けの作品とされている⁸。旧版と新版のフォア文庫版までの絵は久米宏一が、新・名作の愛蔵版は長野ヒデ子が担当した。

初出は雑誌『教育研究』で1964年から1年余連載された⁹。連載時の題名は『進め！

『はくらの海ぞく旗』で、単行本の最終章である第三章のタイトルとなっている。挿画は単行本と同じ久米であった。古田は理論社の小宮山量平に勧められ、一部を加筆修正して単行本化した。1967年には同作品が日本児童文学者協会賞を受けた。1982年にはテレビでドラマ版も放送された⁹⁾。

古田足日は1927年生まれ、父と兄は国文学者で、当時としては経済的に困窮せず、書籍も豊富な家庭で育ったが、終戦後は経済的に苦勞した。大阪外専（のちの大阪外語大学、現在は大阪大学外国語学部）を中退後の1949年に早稲田大学へ編入した。その後も、休学、代用教員、結核による休職など苦勞を重ねた¹⁰⁾。

古田は文学グループの『早大童話会』で主要メンバーを務め、そこでは鳥越信、神宮輝夫、山中恒などと知り合った¹⁰⁾。古田はその機関誌『童苑』に作品を掲載するようになり、のちに同誌が『少年文学』と改題された際の声明文の起草に参加した。児童文学作家仲間でもある砂田弘によれば、『少年文学』の声明文は、「一口でいうと、古いものをこわして新しいものを創りだそうという主張で」、これを契機に「児童文学の世界にはつぎつぎに若い作家が登場するようになり、若手作家の理論的なリーダーとして古田は認識されていたという¹¹⁾。古田は声明発表と同じ1953年に大学を中退し、児童文学評論を執筆し続け、1959年に出した評論『現代児童文学論』で、翌年に第9回日本児童文学者協会新人賞を受賞した¹⁰⁾。

評論を主にしてきた古田自身も児童文学作品を本格的に執筆するようになり、1961年に『ぬすまれた町』、1970年に『ロボット・カミィ』、『大きい1年生と小さな2年生』、『海賊島探検株式会社』、1974年に『おいしいのぼうけん』、1980年に『さくらんぼクラブにクロがきた』などの今も残る名作を出版した。

1993年には『全集 古田足日子どもの本』、全13巻、別巻1を上梓し、1997年には日本児童文学者協会会長に就いた。この全集の『宿題ひきうけ株式会社』所収巻は上記の差別問題を指摘された後に書き換えられ、無料交換もされた⁹⁾。2002年には『ひみつのやくそく』、2004年に米田佐代子と西山利佳とともに『戦争体験集 わたしたちのアジア・太平洋戦争』を出版、2011年には『現代児童文学を問い続けて』を出版するなど晩年まで精力的に活躍した。2014年に自宅で86歳の人生を閉じた¹⁰⁾。

古田は、砂田弘が述べるよう、幅広く、特に児童文学の分野において理論と実践を行ってきた偉大な人物である。上記のように『宿題ひきうけ株式会社』について、古田が70歳を目前としていた高齢期に、当時から30年ほど前に出版した当該作品内にあるアイヌ差別の指摘を受け、大幅に改作し、新版を出したことから、作品や社会に対し誠実にあり続けようとした姿勢が分かる。

『宿題ひきうけ株式会社』のあらすじ

当該作品の概要は次のとおりである。書名の通り小学五年生の児童たちが中心になり、

宿題代行をし報酬を得る「会社」を設立する。一方で、彼らのすることに恐怖心や反発心を抱く児童も現れる。宿題代行業は、ほどなく先生に知られ、子どもたちは「会社」を解散した。ここまでの分量は同書の三分の一もない。児童たちはその過程を通じ、勉強することの意味や、進学や就職についてのキャリア意識、困窮家庭の子どもたちの状況、学校の予算など社会的な問題をも知る。

「会社」解散後、新年度を迎え、多くの登場人物が六年生になったとき、クラス替えがあり、「会社」のメンバーは二学級に分かれた。他校から着任した三宮先生は、これまでの担任の石川先生と異なり、受験競争以外の勉強の意味を教える。三宮先生の薫陶を受けた子どもたちは自主的に、町の昔と今を調べ、「野蛮」、勉強や塾・試験の意味、未来について考えるようになる。新しい発見がある度、彼らはその喜びを共有する。

イジメ加害者の気持ちも理解したうえで、イジメ問題を解決する場面も描かれる。三宮先生が顧問となった新聞部で、「会社」の主要メンバーの多くは活躍し、受験勉強でそこに入部しなかった仲間も、未来を作るために活動を始める。

授業で活用できる具体例

教養小説

筆者が本誌前号および前々号で取り上げた『算数病院事件』⁵⁾や『ぼくがぼくであること』²⁾とも同様に、『宿題ひきうけ株式会社』は子どもの心理的、精神的な成長を描いた物語として捉えられる。

子どもたちをサポートし、ロールモデルとなるような大人が描かれている点では同じだが、『宿題ひきうけ株式会社』が上記の二作品と異なるのは、子どもたちの親が彼らに大きな影響を与える存在としては描かれていないところだ。子どもたちにとり、非血縁者の教員（三宮先生）と、近くにある大きな会社の従業員（キッカワさん）がメンターのような役割を演じている。

『算数病院事件』では、新任の若い女性教師も子どもたちの影響を受け、成長していく様子が描かれた。『ぼくがぼくであること』は主人公の兄姉が変わっていく姿もある程度描かれていた。しかし、『宿題ひきうけ株式会社』では、変わっていく大人は、優等生のアキコの長兄であるが、主要登場人物の子どもたちとの関わりは薄い。妹であるアキコとの関わりですら、直接的には描かれていない。むしろ、長兄に憧れているヨシダ君との接点の方が描かれている。

差別問題

上述したように、新版の『宿題ひきうけ株式会社』は旧版とは大きく異なる部分がある。その経緯は作者の古田自身が記した「新版あとがき——なぜ新版を出すのか 一九九六年九月」に詳述されている。旧版と大きく変わった点は、三宮先生が子どもたちに読ん

で聞かせる物語が、宇野浩二の『春を告げる鳥（旧版では、告げる、ではなく、つげる、と表記）』から、古田自身が創作した『花忍者』に変更されたことである。さらに、「やばん（野蛮）」について新しく考察されたことである。

古田のみならず、筆者も、アイヌ民族では「和人」、沖縄では「ナイチャー（内地の人）」と呼ばれる日本国内では多数派である。筆者もそうだが、日本の多数派はマイノリティーについての知識や理解がかなり不足している。アイヌ民族に関しては近年、人気マンガ・アニメの『ゴールデンカムイ』¹²⁾で知った人もいただろう。沖縄に関しては、観光では大変人気があるが、悲劇の沖縄戦や、半世紀前まで米軍に占領されていたこと、現在も米軍基地が他の都道府県と比較にならないほど広く存在することなどについての意識は浅い¹³⁾。

ジェンダー意識についても気づかされることがある。主要登場人物のタケシの自宅の表札には、父親の村上正夫という氏名が記されている。父親が一家の代表者である、という意識は、当時は当然であり、今もそのように感じている人は少なくないだろう。また、「社長」について、男でなれる人は少なく、女はもっと少ない、という子どもの台詞がある。また、社長になりたい人を挙手させる場面があるが、男子の三分の二以上、女子の半分近くが挙手と描かれている。この傾向も大きくは変わっていないだろう。

これ以外にも作中には、21世紀の現代に繋がる様々な差別が描かれている。貧困、学校の成績や受験競争、イジメ、雇用、配置転換など、この作品を題材にし、学生や生徒たちとディスカッションできる題材が多くある。

「常識」への懐疑

この作品では子どもたちが様々な発見をする設定となっている。例えば、子どもたちは、勉強をせず先生に叱られてばかりだった、近所の野球少年（テルちゃん）が一千万円の契約金でプロ野球選手になる、というニュースを知り、ショックを受ける。ミツエの姉は大卒で就職したばかりだが、月給は二万五千円に過ぎない。母子家庭で母親が家政婦をしているアキコには、テルちゃんと同級生だった次兄がいる。彼は衣料品屋の住み込み店員をして、夜間に定時制高校に通っている。その次兄や算盤名人で高給を得ている長兄や中学二年の姉は、優等生のアキコに東大進学を期待をかける。このような子どもたちは勉強し、大学を出ても二万五千円、勉強せずに野球だけしても一千万円、と宿題をする気力を失う。そこで宿題代行業をしよう、という話に発展していくのである。勉強し、好成绩を修め、所謂「いい高校、いい大学」に進学し、大会社に就職し、高給取りになり、「いい生活」を送り、社長を目指す、という近代日本の典型的な「常識」への懐疑が描かれている。これは作者の古田の父が国文学者で、兄は東大に進学し、学者となった、近代の日本人が憧れる典型的な成功者だった一方で、古田自身は東大受験に失敗した苦い経験を持つからだらうとも推測される¹⁰⁾。

古田は作中で、タケシがケストナーの『エミールと少年探偵団』を引き、「音より速い飛行機ができて、四季と宿題はなくならなかった」と言わせる場面を作った。そのタケシは後に、宿題や試験を無くすことができるのではないかと考えるようになる。そのために、新聞部で記事を書き、それを読んで集まった同じ小学校や他校の仲間と動き始める場面がラストシーンとなっている。まえがきに古田は「ニンジンが嫌いでも食べないといけないが、宿題はそうではない」という内容の詩を出している。この作品が宿題を有料で代行する会社を作るところから始まるものの、最後は宿題そのものの存在意義を考える話だと示唆している。

また、物語前半で同級生が学校に一つしかなかった地球儀を壊したとき、校長に「優等賞」の賞金を地球儀購入に充てて欲しい、とアキコが頼むなど、交渉する。このように子どもたちは、社会や未来は自分が作るもの、という考えを得て社会変革を志す。このような、目標を明確にした行動は大学の授業でも重要な教育目的となっているため、例として役立つ。

ところで、昔は野蛮だったという常識を、現代も別の観点から野蛮であると考え直す場面なども描かれている。また、子どもたちが自分で記事を書いたり、調べたりする勉強は楽しいと感じる場面がある。これらは、人が半ば無意識に身に付けた常識（文化）を相対化させる視点であり、筆者の授業でも好例として紹介している。

技術革新と仕事

この作品が執筆された1960年代は高度経済成長期で技術革新も著しかった時代である。作中でも、大手電機メーカー（ヤマト電機）にコンピューター（電子計算機）が導入されたことで、算盤名人で税や社会保険料など複雑な給与計算にあっていたアキコの長兄が配置転換を余儀なくされた場面がある。そのアキコの長兄に憧れ、貧困を脱却するため、中卒でヤマト電機に好条件で就職できる算盤名人を目指し、熱心に算盤を練習していたヨシダ君も大きな衝撃を受け、人生設計、つまりキャリアを考え直すのであった。

同級生のサナエが桑畑を持ち、養蚕業を営んでいた祖父について、作文を読み上げるシーンがある。戦争により桑畑を陸稲や野菜を作る場に変え、戦後に桑畑に戻したものの、化学繊維の普及により、繭が売れず、廃業したという詩だ。

タケシはこれらの話を聞き、技術が発展し、世の中が進んだ一方で、アキコの兄のような不幸を考える。ヨシダ君は算盤のように手に職をつければ学歴が無くても良いと思っていたが、散髪屋（理容師）になっても、散髪ロボットを使うようになると、同じことになるだろう、と語る。電話局に勤める父を持つサブローはダイヤル化によって交換手の大量解雇が発生することを知らせる。

便利になり、合理的になると、その分、仕事が無くなったり、変わったりする。この作品では、散髪、パーマメント、車の運転、タイプが「手に職」という技術として挙げられ

ているが、それらも機械に置き換えられつつある。21世紀の現在も AI の発達により、人間の仕事の多くが消滅する、と言われている。この作品発表から半世紀以上経った現在も同種のことが繰り返されているわけだ。将来も、AI 以外の、現在の我々が全く予想もしない技術革新が起こり、同様のことが起きるだろう。

これらの部分は学生のキャリア意識を醸成させ、ドラッガーの言う、常に状況を分析し、変化に対応できる人になるために重要な示唆を与えてくれるだろう。

固有名詞・敬称

この作品の舞台となる学校はサクラ市サクラ小学校で、「仮名」となっている。「宿題ひきうけ株式会社」を置くタケシの家は、サクラが丘団地六号館408という設定である。古田がこの作品の後に著した『海賊島探検株式会社』ではサクラ町サクラ中学校の中学生が主要登場人物たちである。「サクラ」は古田にとって地名として使いやすいものなのだろう。他に、キク小学校、ツバメが丘、という片仮名標記の地名が見える。

「宿題ひきうけ株式会社」の社長は村山タケシ、一学年下の弟はフミオと地の文で書かれる。背の高い美人の同級生は丘ミツエで、「ミッチャン」と呼ばれる。大野サブローは小さい体のため、「ちびレーダー」と呼ばれる。これらの表現は今では身体差別的な用語として拙い。

算盤名人の兄を持つ優等生はハシモトアキコで、「アキちゃん」と呼ばれる。『海賊島探検株式会社』では、美人の優等生がアキという名であることは、偶然の一致だろうか。アキコの育つ母子家庭を支える母の名や兄姉の名は出てこない。主要なキャラクターとしては位置づけられていないことが、このようなことから窺える。

社会科が得意でアキコとともに「会社」で宿題を解く係になったのがヨシヒロである。イジメの被害者がシバタ君、家庭教師に教わっているのが吉岡さんやヒロシ君、タケシの営業先はビデオやアイザワ君である。ミツエの営業先は、貧しい戦前のアパートに住み、算盤名人を目指すヨシダ君であった。ヨシダ君には弟妹がおり、末弟がセイぼうと呼ばれる二歳くらいの男児である。〇〇ボウ（坊）という呼び方は、今はそれほど多くないのかもしれない。サブローの営業先は八百善という八百屋の息子・モリカワ君で、母親の「ススムちゃん」という台詞からススムという名であることが分かる仕掛けとなっている。次の営業先が仲良しのミチコで、その途中でトンちゃんと出会う。トンちゃんの兄が目指す進学校はアサヒ高校という。サクラとアサヒ、いずれも戦前、戦中の日本の象徴のような名称である。

アキコ以外に優等生として登場するのが、学級委員のスズキ君とミドリさん、ガリ勉で他者と関わらない、栄養過剰のミツムラ君である。ミッチャン、アキちゃん、と異なり、敬称の「さん」付けで呼ばれているミドリは、主要登場人物とは心理的な距離があるのだろうと思わされる。「君」が付いているキャラクターも、タケシたちとは気安い関係では

ない様子が伝わってくる。その他、カワムラ君、ジロちゃんなど、氏名の大半が片仮名表記である。

子どもに慕われる進取の気風を持った三宮先生や、受験競争の厳しさの風潮通りに子どもたちを指導する石川先生は漢字で表されているが、ヨシダ君の相談に乗るヤマト電機若手社員でアキコの長兄とも仲の良い青年はキッカワさんと片仮名表記されている。これらは教師の立場が子どもたちと距離があることを示しているのかもしれない。

このように、呼び名や表記の仕方のみで作者の意図や無意識の気持ちが窺える。つまり、さまざまな創作や評論をしていく学生にとり、この作品は重要なテキストの一つであることを示している。

時代背景

高度経済成長期を描いたこの物語は、フィクションとはいえ、当時の時代を彷彿とさせる描写や単語が出てくる。

子どもたちの親世代の学童期は農繁休暇があり、田植えや稲刈りで学校が休みになり、普段でも手伝いをしていたと、ヨシヒロに語らせている。現在、農繁休暇はあるのだろうか。プール建設の寄付の是非も描かれているが、プールが各学校にできた現在は忘れられた歴史の一コマだろう。また、「保母」や「家政婦」という表記があるが、今は余り使われない。

物品でいえば、タケシのダイニングで母親がメモがわりに使っている小さな黒板と白墨がある。デジタル化が進む現在でも日本の学校の多くは、チョークを使っている。チョークはかつて、白墨と呼ばれた。筆につけて紙に文字などを描く、黒い墨汁に対する「白」い「墨」のようなもの、という意味である。この言葉を今の学生はほとんど知らないだろう。主要登場人物の同級生であるトンちゃんの自宅は、竹の垣根があり、庭の木戸がある。そこからトンちゃんの兄が自転車を押して出てくるシーンがある。竹の垣根の家も、庭に木戸を立てている家も、少なくなっている。

子どもたちが乾杯する時に出てくる「粉末ジュース」も、今は珍しいだろう。子どもが、「会社」の解散式で、『蛍の光』を歌い、デコレーションケーキに入刀することをセレモニー的に捉えていることも稀だろう。オルゴールが学校で授業開始時刻などを知らせる音になっていること、朝礼時に全校生徒が運動場に並ばされることなども、今はほとんどないに違いない。

ご馳走の代名詞のように「ビフテキ」という言葉が登場するが、現在はステーキと呼ぶだろう。従業員の管理記録簿は「エンマ帳」と記されているが、現在、閻魔帳という言葉を使う若者は稀に違いない。登場人物が電話をする時も「番号を回し」という記述があるが、現在の携帯電話、その前のプッシュホン式の電話でも考えられない記述である。イジメ加害者を「ボス」と表記することも、今はほとんどないだろう。ソ連（ソビエト連邦）

という、今は存在しない国名も登場する。

また、子どもたちの一部が訪れる保育園は、建物も運動場も狭く、ピアノもなく可哀想だという記述がある。今はピアノも相対的に安価となり、保育の現場にも設置されていることが通常だろう。彼らの小学校は、校区に団地ができ児童数が激増し、運動場で縄跳びやドッジボールが禁止になるほどだという。これも高度経済成長期に工場がある都市部に人口が集中したことを上手く示している。

アキコ達が、昔の子どもたちと遊ぶ気持ちになり、原っぱでヨモギ、ヨメナ、ホトケノザを摘んでままごとをする場面もあるが、一方で、都市化、工業化と関わるインフラ整備、環境変化を示す記述もある。モリカワ君がサブローに呼び出されたのは、店の横の路地となっている。舗装されていない道路や、新しく通ったという新国道も登場する。路地や未舗装道路は高度経済成長で次々と消えた。また、子どもたちが未来から過去を見るつもりで町の変化を調べる宿題をしているシーンでは、新国道をトラック、乗用車、オート三輪車の行列が高速で進み、その先にヤマト電機の工場があり、新国道と交差する道は工場内に繋がり、信号機や家ができた、と書かれている。その辺りは、かつては葦原で、江戸期末に開かれた平兵衛新田となり、一面緑の蓮の葉が茂る池もあったが、物語の頃は道路や、黒い水の中に枯れた葦の残る小さな汚い池になってしまった、とある。物語の時期の二年前と比べ交通量も激増した。これらの設定は、高度経済成長期から現在まで、都市部では普遍的に見られた、しかしかなり重大な変化である。

この物語の頃は、アキコの兄たちが自転車通勤をしていることになっているが、それが自家用車に代わっていくのだろう。その過渡期があったと読み取れる。

タケシたちが忍術の修行のために、呼吸を止める競争をするシーンがある。今の小学校高学年の子どもたちがどの程度、忍者になりたいと思ひ、そのような「修行」という遊びをするだろうか。また、その修行時に子どもが時間を測るために目覚まし時計の秒針を見ているわけだが、今、そのようなことをする場合は、スマートフォンなどでデジタル表示をさせたり、ストップウォッチ機能を使ったりするだろう。

夫婦共働きで、子どもが帰宅した際に解錠して家に入る「鍵っ子」という言葉こそ出てこないが、主要登場人物のタケシは首からカギをぶら下げて登校すると描かれている。タケシの両親がいないからこそ、「宿題ひきうけ株式会社」の会議も、それ以外の集まりも、彼の家ダイニングで行われる、という設定だ。

そのタケシは弟のフミオと二人兄弟である。一方、貧しいヨシダ君やアキコの家は、兄弟姉妹が多数いるという設定であるのは、余り良い言葉ではないが「貧乏人の子沢山」ということを描いているのだろうか。

算盤名人を目指すヨシダ君は長子で、一学年下に弟、三学年下の妹、まだ二歳の弟もいる。古い六畳一間のアパート住まいで、弟の寝床は押し入れで、発熱しても家にいられず、登校する。夕食のサンマも丸ごと一匹ずつは与えられていない。ヨシダ君の父はヤマ

ト電機の下請けのムラカミ製作所の臨時工で、低賃金であることが描かれている。そのため、ヨシダ君は新聞配達で稼ぎ、そのお金を家計に入れている。彼は、小学生の弟も廃品回収や買物代行のアルバイトくらいできるはずだと考えている。これらは、現代の子どもの貧困問題にも通じる。

ヨシダ君のアパートはドブ川ぞいの鉄筋コンクリート三階建てで、戦前に建ったものという設定である。壁が剥げ、ヒビが入り、階段が壊れ、窓ガラスの代わりに新聞紙が貼られている。おしっことカビのにおいがする。高度経済成長期は戦災を免れた古い建築物に住む貧しい人もいたことを示している。

母子家庭で、母親が家政婦のアキコは二人の兄は働いており、長兄は算盤名人で大型計算機導入までは高給を得、次兄は衣料品店の住み込み店員で定時制高校に夜間に通い、中学生の姉がいる四人兄弟だ。勉強が得意な彼女は家族から東大に行き、貧困から抜け出す期待をかけられている。学歴社会の差別的な構造を知り、それに対する違和感を覚えた後も、アキコは家族の期待を裏切るようなことはできない。トンちゃんの兄は進学塾に行き、中学校の上位10%にいますが、最も東大進学率の高いアサヒ高校受験に失敗した。彼が一流高校、一流大学、大会社に就職、ルームクーラーつきの家に住む未来を描き、一日五時間の睡眠時間で猛勉強している、と弟のトンちゃんに言わせている。当時の日本にはそのような人が非常に多くおり、今も同様の夢を背負わされている子どもは意外と存在する。

八百屋の自営業をしているモリカワススムという子どもも出てくる。彼は店先に出て、商品を売る手伝いもしている。そこには高校生くらいの若い店員もいる設定である。もう一人いた若い衆は独立し新店を出したという。このように修行を積み、独立していく人生の経路は今も残っているが、小さな店舗を営む家庭や、そこで中卒の店員が働くことは随分減っているだろう。ヨシダ君のメンターのような存在のキッカワ青年は、新聞配達をした後、ヤマト電機に勤務するようになった。このような転職も現在は少ないだろう。

ヨシダ君が通う算盤塾では、助手の先生が号令や読み上げ算の担当に当たっている。コンピューター普及後の今は算盤塾が隆盛を極めることは稀で、助手を雇う余裕もなくなっただろう。

ヨシダ君が塾の帰りに質屋の質流れ品の腕時計を夕刊配達と塾の時刻を正確に見るために欲しいと覗き込むシーンがある。インターネット取引が広がり、質屋も高級ブランドの品物を中心に商う現在、質流れ品を小学生が覗き、更にその品として背広やカメラが並ぶことも稀だろう。また「背広」という名称も使われなくなってきている。

プロ野球の契約金が一千万円で、子どもたちが驚き、ミツエが大卒の姉の初任給が2万5千円と嘆く場面がある。サブローがお年玉でたまに千円を貰っても母親に取られる、という話も出てくる。当時の千円はかなり価値が高かったことも分かる。宿題を引き受ける料金も十円、十五円の単位である。アキコの兄たちがまた物価が高騰しているにもかかわらず

らず、ボーナスが安いと怒るシーンもある。現在の貨幣価値とは異なることや、高度経済成長期、所得倍増など、賃金も物価も上昇し、日本経済が上向っていたことを学ぶための好適な教材である。

サブローの母がお年玉を取り上げるのは、中学進学時に靴や万年筆を買うために貯金するからだ。現在の中学生も、制服や鞆など、費用が高むが、少なくとも公立中学校では万年筆を使うことは稀だろう。中卒で社会人になる人が多かった当時の中学生はそんなことがあったのか、と考えさせられる記述である。

子どもの人間関係

この作品はフィクションだが、子どもの人間関係は現実にも有り得る設定である。

例えば、宿題代行について、ミツムラ君が告げ口するように、正直に宿題をする者が損だ、という考え方は真面目な児童、生徒、学生が抜け駆けや教師の最悪で好成绩や教員からの賞賛を獲得することに対して抱く思いだろう。

宿題代行について石川先生が咎める場面では、タケシ、ミツコは安い家庭教師のつもりだったと述べ、ヨシダ君は弟妹や同じアパートの子達に勉強を教えてくれたと庇う。その一方で、優等生のアキコ、社会科に優れたヨシヒロ、受験勉強に追い立てられる気持ちを抱えたサブローは黙っていた。しかし、上述した、地球儀を壊したことを謝罪し、新しいものを買うよう校長に頼みにいくときの代表選出時に、ミツエに対し、難色を示された際、アキコはヨシダ君とともにミツエを推挙した。また、解散式の最後に、アキコ達はタケシとミツエに謝り、二人も彼らを許した。彼らは心を動かす発見をした際、電話や集まることで、その喜びを共有しようとする。このような友情は今の子どもも懂れるだろう。

イジメ問題も描かれている。コウヘイとノブオがシバタ君から金銭を脅し取ろうとする。アキコが止め、ノブオに打たれ、それを止めたヨシヒロが酷く殴られる。抗議するタケシは緊急で問題を議論する学級会を開催するよう先生に要求する。多くの子どもは関わり合いを恐れ、どちらの味方もしない。現在、アキコやヨシヒロのように、勇気をもって行動する子どもはどの程度いるだろうか。また、イジメ被害者のシバタ君をクラスの多くの子どもが守ろうと行動したり、新聞部でイジメ加害者追放キャンペーンを行ったりする場面が描かれているが、現実的には難しいのかもしれない。

イジメの標的にされにくい子どもがいる、という記述もある。その例が「何となく尊敬されている」アキコだが、彼女が「宿題ひきうけ株式会社」にいたことを知ったコウヘイが、アキコらを攻撃するようになる。これも現実にあることである。悪事を働くグループのリーダーが、悪人に対して悪いことをしても良い、という彼らに内在するルールを説明するマンガもある¹⁴⁾。これは、悪人は自身の悪事の露見を恐れ、被害を訴え出にくいことも理由だろうが、それ以外の理由もあるのかもしれない。

徹底的に他人に関わらず、受験勉強を続ける肥満のミツムラ君は、自分の勉強時間を確

保するために、学級会の開催にも反対し、先生にも面と向かって抗議する。彼にタケシは一種の清々しさを感じる。絶対的な強者の教員に従わず、自身の欲望を押し通そうとする人に敬意を抱くことも子どものみならず、大人にもあるだろう。

一方で、イジメ加害者のコウヘイもノブオも、自身を糾弾する可能性の高い学級会開催反対決議に、すぐ反応できない。上記のミツムラ君の挙手を見て追随するだけだ。彼らは多くの子どもが「口をきかない」決議により、彼らと関わらなくなったことで、心理的に辛くなったという描写もある。このように、明確に強い意思を持たない、イジメ加害者は大勢いるだろう。

コウヘイにイジメ加害者の気持ちを尋ねるインタビューを敢行したミツエは、コウヘイを排除するのではなく、褒めながら会話の糸口を掴む。コウヘイは親からのプレッシャーが面白くない、という本音をある程度漏らす。子どもに限らず、他者に話を尋ねる際は、相手を受け入れる姿勢は重要である。そのことを連想させる場面だ。

他者に認められたい気持ち、勉強のプレッシャーから、コウヘイは腕力の方の優等生になりたかった、と新聞部の編集長のマドちゃんは分析する。悪い成績でイジメの標的にもされるシバタ君への同情心をサブローたちは抱く。また、ヨシダ君はコウヘイに、貧困者のことも考えるよう説得する。コウヘイもそれを理解する。他者への共感人間関係の基礎であるが、それが上手く描かれている。

三宮先生はイジメ加害者に教員が叱るだけでは問題の解決にならないという。子どもたちの意識や行動を変える必要があるというが、現実でもその通りだろう。イジメ問題は現在もあり、残念ながら隠蔽も行われていると聞く。イジメが発生した場合はすぐに対処し、教師による隠蔽が厳しく罰せられ、かつ、解決を担任教師のみに押し付けず教員集団が助け合い対処することが、イジメの解決に繋がると筆者は考えるが、それは難しいことなのだろうか。

総合的な学習・探究

物語の中で、子どもたちは今でいう、「総合的な学習」や「総合的な探究」を行っている。それ以外にも、手掛かりとなるような記述は多い。以下、例を示す。

「宿題ひきうけ株式会社」で、ヨシダ君の幼い弟妹に、アキコが勉強を教えるようになった後、勉強しなかったヨシダ君の弟妹は勉強し始める。貧困で保護者が子どもの教育、勉強に傾注する余裕がなければ、大抵は勉強が分からなくなり、成績も下がるだろう。そのような問題は現在も起きている。

彼らが解く宿題のなかに、日本の主要輸出入品と貿易相手国や、石油の輸入元の国を調べるものがある。後者について、担当のヨシヒロは、クウェートについて調べる過程で、グリーンランドの大きさに興味を持ち、球形の地球儀と平面上の地図の描き方の差も知るようになる。実際に地球儀を見なくなったヨシヒロは、ヨシダ君の助けもあり文具店で見

せてもらう。これが発端となり、地球儀の取り合いが発生し、学校の地球儀が壊れる。その描写は「パナマ運河あたりが無くなった」となっている。これらの記述により実際に地球儀に触れたいくなる子どももいるだろう。

ヨシダ君は児童数に比して地球儀が少ないと述べる。地球儀の原資は親が納めた税金であることも知る。また、憲法や法律が様々な権利を保障したり、制限したりすることを知る。

また、三宮先生が出題した、未来の視点を入れ、サクラ市もしくは日本全体の昔と今を比べ、野蛮について考察する宿題に、サナエ、スズキ君、タケシが取り組む意欲を見せ、ヨシヒロとアキコもタケシと共に調べ、他のクラスにいるミツエとサブローを誘おうと考える。この課題は、現在も取り組む意義は大きいだろう。タケシたちは自分たちがタイムマシンで現代にやってきた設定で、町を探索する。かつての子どもたちがままごとで遊んだ跡を見つけ、感動したり、保育士の源流が子守の子どもたちだと発見したりする。その時に、「廻国」という、経典を各国の寺に納めることも知る。このようなプロセスで昔より今が良くなっているとは限らず、未来から見ると今は野蛮かもしれない、受験を苦にした自殺や戦争や原爆など昔と似た野蛮さがある、未来も輝かしいものとは限らない、という考察に至る。また、「野蛮」を調べたアキコは文化が開けている、開けていない、という感性自体が人を見下していると感じる。

そのような児童の探究の場面に出会った三宮先生は『わたしたちのまち・サクラ市』副読本を作るために、取材活動をしていた。三宮先生が自治体のことを学ぶための副読本を作る意欲的な教師であることを示している。このような熱心な教師により、総合的な学習の時間が誕生してきたのだろう。

子守の光の面を語るミツエに、三宮先生は子守も楽しさのみならず、遊び盛りの子どもたちの気持ちを押し潰した一面もあることも語る。彼は子守唄の中には悲しいものもある、保育所ができたことは進歩だとも語った。

近代社会の理想

作品で理想的な教師として描かれる三宮先生は、人間の気持ちは変化せず、それぞれの時代に長所と短所があり、社会や人間のなかにある野蛮さと、人間尊重は続き、大まかにはうねりながら人間は進んできたと思うと語る。単純ではないが、人間の進歩を信じる価値観に基づいている。

この作品では、子どもたちが多くの人は豊かな生活を得るため、受験勉強に励まなくてはならない圧力を受けている。その象徴的な言葉は「社長」である。三宮先生は、社長になりたいという夢は、高給で、やりがいを感じられ、他者からの尊敬も得られる状態で、「花が咲くよう」な豊かな人生に集約されると解説する。この価値観は今もあるだろう。その言葉から様々な勉強をした子どもたちは、宿題や入試で子どもが厳しく評価されない

社会を作ろうとする。

例えば、サブローは、勉強は貯金と似ており、後で楽をするためにあり、就職するまでが貯金期間、就職しても誂首問題が発生した場合、誂首される方ではなく、誂首する側になるために自分が勉強させられていると気づく。彼は本当の勉強をしたくなる。筆者もその選択が良いと思う。ただし、彼がその時代に実在したとして、その後、どのような人生を歩むことになったのだろうか、と考えさせられる。そのような理想を追い求めることには、幸福になる保証はなく、むしろ、社会的（世間的）な制裁を受けることも少なくないからだ。

これらのことは人権という概念や国民の主権といった考え方に基づいている。それらは非常に重要なものであると筆者も考えるが、それを完全に保証・証明するものはない「主義」である。つまり基盤がそれほど強固ではない。この作品が上梓された時期から半世紀以上経った現在、受験や誂首などの基本的な苦しみは変わっていない。近代の理想が、社会の仕組みや文化、人間の本質との乖離があるからではないだろうか。このように本質的に考えていく上でも、本書からは重要な示唆を得られる。

貧困と教養

貧困からの脱出を現実的に考えているヨシダ君は先生に、自分のアパートに住む貧しい大人はクウェートがどこにあり、日本が石油をどこから輸入しているか、誰も知らないが何とか生きている、と発言する。これは現在でも、選挙や様々な社会問題における「無関心」と同種のものだろう。貧困故に保護者が子どもの教育、勉強に傾注する余裕がなければ、大抵は勉強が分からなくなり、成績も下がる。そのような問題は現在も起きている。一方で、「宿題ひきうけ株式会社」で、ヨシダ君の幼い弟妹に、アキコが勉強を教えるようになった後、弟妹達は勉強し始める。このようなことも、また現実にある。

ヨシダ君は、彼自身を含む貧しい人は「勉強するより、そろばんやる方がいいと思」うと教員に反論する。高校進学できない彼が貧困から脱するには、アキコの長兄のようになる、という明確な目標を定めたからであり、今も同様に「〇〇を勉強して何の役に立つのか」と思っている人は少なくないだろう。しかし、上述したように算盤もコンピューターに駆逐されたように、「分かりやすい」技術や知識は新規技術の出現で重要なものでなくなる。ヨシダ君のメンターのようなキッカワさんが仕事と関係ないロシア語を学び、「人間はすぐに役に立たないことでも」したくなり、勉強は「ある程度回り道をす」るものだと語る。彼のように、筆者は時代変化に応じて自身を変えていける教養が必要だろうと考えるが、経済的・心理的余裕のない人にそれを伝えるのは非常に困難であることは、日々の授業で実感している。

そのヨシダ君やイジメ被害者のシバタ君は貧困で高校進学を諦めている。シバタ君は同級生のサブローとトンちゃんが地球儀を取り合い、壊してしまった時に弁償する余裕がな

いため、連帯責任を拒否し、当事者のみの責任にするような発言をし、タケシと喧嘩になる。「金持ち喧嘩せず」、「貧すれば鈍する」という諺が示すよう、貧困で他者との諍いに巻き込まれやすかったり、諍いを起こしやすかったりする問題を社会的に考える必要があることを、この作品からも議論できるだろう。

作中作と引用

作者の古田は、さまざまな文章を引用している。上で述べたように、エーリッヒ・ケストナーの『エミールと少年探偵団』からは、「飛行機ができて四季と宿題はなくならなかった」という有名な一節をタケシが何度か思い出す設定になっている。

上で記した差別の指摘を受け、古田が『春を告げる鳥』と差し替えた『花忍者』は心優しい主人公が厳しい時代で生きられない悲劇と友情の部分が上手く伝わるよう、創作されている。私事だが筆者も思わず涙が出るような物語であった。

また「野蛮」について子どもたちが考える際に、アキコは尾上兼英が監修した『旺文社小学漢字新辞典 改訂版』を、スズキ君は新村出が編纂した『広辞苑 第四版』を引いたことになっている。貧しいアキコが子ども向けの辞典を引き、優等生の学級委員が広辞苑を参照する設定に工夫がある。

また、実在の児童が記した文章を加筆し、作品の登場人物が読む作文や詩にしている。サナエの作文は『柏市土小学校研究収録第二集』から、三宮先生の読む詩は『長岡市四郎丸小学校』の児童のもので、古田が千葉や新潟の文献も渉猟していることが分かる。

アキコが図書館で借りて読む童話は平塚武二の『ままごとのあと』で、それは童話集『ながれぼし』に収められたものだという。『春を告げる鳥』もふくめ、古田が幼い頃から多数の書籍に囲まれる、恵まれた生育環境だったことを想起させる。

アルベール・カミュの『ヒロシマ』や、広島原爆の死没者数については、中国新聞社の『年表ヒロシマ』や、日本準備委員会が編集し朝日イブニングニュース社が発行した『被爆の実相と被爆者の実情・1977NGO 被爆問題シンポジウム報告書』を参照したとある。

その他

他にも様々なことを学ぶ端緒がある。サクラ小学校という名称のために桜を植えたということ以外に、他の事例も多数ある。桜のサクランボが不味く、子どもたちが、ナシ、リンゴ、ミカン、バナナ、パイナップル、ヤシなどの果樹に植え替えると話す場面から、果樹や交配、クローンについて学ぶことができる。

作中作の『花忍者』からは、亥の子祭り、子ども組、正月小屋、福寿草、山伏修行、天狗、祠、滝行、呪文、領主、イニシエーション、盆踊り、祭りは単なる遊びではないこと、彼岸花など様々な事物や文化、民俗について学べる。

戦争についても、戦死、徴兵、ユダヤ人虐殺、原爆など幅広くテーマを設定できる。それ以外にも、ローマ教皇庁（法王庁）、わらべうたの「ずいずいずっころばし」には将軍への茶壺献上行列の意味があること、五段階相対評価の場合は1と5が7%、2と4が24%、3が38%であること、かつての電電公社や、憲法に保障された請願権や義務教育などの権利及び義務、二宮金次郎などについても知る手掛かりがある。また、「ミズ・アキコ」という、Miss でも Mrs. でもない英語の敬称が記されていることも、学びの入り口となるだろう。

大人の学びに有益な児童文学

上で述べたとおり、『宿題ひきうけ株式会社』は大学生を含む大人の学びにおいても有効なテキストとなる。これを活用できれば、昭和の高度経済成長期と現在の半世紀で何がどのように変化したか、もしくは不変かが理解しやすくなる。

筆者は『宿題ひきうけ株式会社』を小学校の図書室で最初に読んだ。2022年に読み返す前、登場する子どもたちが宿題をひきうける会社を作り、解散するまでと、解散後にさまざまな発見をしていく物語の一部は記憶していた。

しかし、再読時は記憶にない細部にも非常に大きな意味があることに気づかされた。例えば昭和の高度経済成長期の社会・文化と、現在との差異である。1990年代に古田が差別問題の指摘を受け、「野蛮」について考え、大幅に改稿したことについても、初めて知った。加えて、「人道上の罪」や「人権」と近代国家の成立の歴史を学んだ後に読み返すと、この書籍が持つ輝かしい希望と、近代国家の問題点との落差も感じさせられ、感慨深い。

『宿題ひきうけ株式会社』は、大学生や社会人などにとっても、日本経済が右肩上がりだった高度経済成長期の希望や理想と、「衰退途上国」と一部で揶揄される日本の現状を考えるうえで、重要な示唆を与えるだろう。

謝辞

本稿は名古屋芸術大学の個別研究費および令和3（2021）年度および令和4（2022）年度の特別研究費（課題名「高大接続教育、大学教育、社会人教育における児童・ヤングアダルト文学作品およびマンガ作品の教材としての利用」）の助成を受けた。複数の学生から現在の人気のある作品や、学生自身が影響を受けた作品を教えて貰った。編集と出版に尽力して下さった名古屋芸術大学図書館の教職員各位、校正にあられた印刷・製本会社の方にも感謝する。

文献および註

- 1) 茶谷薫、2020、大学教育における児童文学作品の活用(1)—カニグズバーグとリンドグレーンの生涯と作品から—、名古屋芸術大学研究紀要41巻 107-121
- 2) 茶谷薫、2021、大学教育における児童文学作品の活用(2)—山中恒『はくがはくであること』から—、

名古屋芸術大学研究紀要42巻 157-166

- 3) 茶谷薫、2021、茶谷薫、「学習マンガ」ではなく「娯楽マンガ」を教材利用する意義—『スター・レッド』を例に一、名古屋芸術大学教職センター紀要9号、2020、1-13
- 4) 茶谷薫、2021、娯楽マンガ作品を教材に『暗殺教室』に描かれた理想の教師・学校像、名古屋芸術大学キャリアセンター紀要10号 63-75
- 5) 茶谷薫、2022、大学教育における児童文学作品の活用(3)—後藤竜二『算数病院事件』から一、名古屋芸術大学研究紀要第43巻 143-157
- 6) 茶谷薫、2022、娯楽マンガ作品を教材に(3) 山田芳裕作『望郷太郎』、名古屋芸術大学教職センター紀要11号
- 7) 本稿では古田足日、2001、新版宿題ひきうけ株式会社の新・名作の愛蔵版を底本としたが、その他の版も参照している。
- 8) 理論社 WEB サイト、<https://www.rironsha.com/book/00513>、2022年10月28日閲覧
- 9) 財団法人大阪国際児童文学館 WEB サイト、<http://www.iiclo.or.jp/100books/1946/htm/frame043.htm>、2022年10月28日閲覧
- 10) ありがとう古田足日の会、2015、古田足日さんからのバトン、かもがわ出版
- 11) 砂田弘、1976、古田著・海賊島探検株式会社の巻末解説
- 12) 野田サトルの人気マンガ作品。集英社の『週刊ヤングジャンプ』で2014年から2022年まで連載され、単行本31巻、アニメ化された。
- 13) 沖縄県 WEB サイトには『沖縄から伝えたい。米軍基地の話。Q&A Book』がある。<https://www.pref.okinawa.jp/site/chijiko/kichitai/tyosa/qanda.html>、2022年10月28日閲覧
- 14) usagi、2022、地元最高！(1)、彩図社